

交牧連、
熊本で全国・新人研修会開催

地域交流牧場全国連絡会（交牧連）は2月25日、熊本市で平成22年度全国・新人研修会を開いた。研修会は消費者との交流活動のレベルアップを目的に毎年開いている。全国の会員酪農家など90人が参加した。

● 今後の酪農体験は難しい局面・藤田会長

初日の25日の開会式では、藤田毅会長（新潟県・フジタファーム）が「昨年の宮崎県の口蹄疫では交牧連も打撃を受け、酪農体験を自粛するなどこれまでとは違う状況に置かれた。現在も韓国で口蹄疫が発生し続けていて、状況は難しい。自分たちの牧場は自分たちで守らなければならない。酪農情勢は牛乳の消費低下やT P P（環太平洋連携協定）の参加問題など不安定要素が多く、交牧連の存在意義とも言える酪農体験をこれからどのように進めていくか、難しいところに来ている。酪農の原点に戻りながら、皆さんと研修会を進めていければありがたい」と主催者挨拶した。

来賓出席した九州農政局の國弘実次長と熊本県の廣田大作農林水産部長は厳しい酪農事情について言及、交牧連の今後の活動成果に期待した。また、熊本県酪連の新美浩常務は総務省発表の22年の家計調査で牛乳の年間購入量が微増したことにつれ「交牧連の交流活動の成果の表れだと確信している」と述べた。

一方、東亜大学大学院元教授の和仁皓明氏は「わが国の乳食文化」をテーマに基調講演し、「日本の乳・乳食文化はまだ浅い。国際競争もあるので、より真摯な経営努力が求められる」と述べた。

● 酪農に貢献する活動テーマに
パネルディスカッション

また、研修会では「われわれは、交牧連の活動を通していかに日本酪農に貢献していくのか？」をテーマにパネルディスカッションを開催した。藤田会長のほか、横尾文三交牧連初代会長（佐賀県・ヨコオ牧場）、廣瀬文彦2代目会長（北海道・広瀬牧場）、西田敦子理事（全国退職女性校長会役員）、監事を務める日本酪農乳業協会の前田浩史専務の5人が出席した。

前田監事は、酪農や乳の価値について「酪農や乳には市場で決まる価値以外に、酪農教育ファーム活動や6次産業化など、まだ評価されていない価値がある」と考える。牛乳・乳製品市場は従来とは変わり、頑張れ

ばどンドン右肩上がりに成長するものではなくなった。穀物価格高騰やT P P（環太平洋連携協定）などの問題で酪農家は混乱しているが、社会全体が豊かになるような変化を自ら作っていかなくてはいけない。乳の価値を再定義し、価値を実現できる酪農経営、価値を社会全体で共有するための消費者との関係構築を目指す必要がある」と指摘した。

パネラーからは、交牧連の今後の活動について意見を表明。西田氏は消費者の観点から「牧場には温かさ、豊かさ、楽しさなど、人間にとって大事なものがある」と評価した上で「酪農教育ファーム活動が画一化しているように感じる。もっと自由で、個性的でもいい」と述べた。横尾氏は「乳製品を地方の食文化として定着させるため、産地直売所などに活路を見出してもいいのでは」と6次産業化への積極的な取り組みを提案。廣瀬氏は「消費者との交流活動をまだ異端視している酪農家もいる。仲間を増やすことが重要」とし、藤田会長は「仲間を増やすには、自分たちの経営がしっかりしていることが大事。そうでなければ、誰も話を聞いてくれない」と強調した。

参加者は26日に熊本県西原村の阿蘇ミルク牧場を視察。チーズ作りについて分科会を開いたほか、チーズ振興対策事業や6次産業化について全体研修した。



地域交流牧場連絡会が全国・新人研修会を開催